

〔研究ノート〕

胎児はなぜ排出されたか

——「棺内分娩」現象の解明——

佐 立 治 人

目 次

- 一 妊婦が死後に出産した話
- 二 棺内分娩の原因の解明

一 妊婦が死後に出産した話

懐胎したまま亡くなった婦人が墓中で出産し、幽霊となつて近所の店で餅や飴を買つて子供に与える、という墓中子育て幽霊話が日本全国に分布していることは、よく知られている事実である（『日本伝奇伝説大事典』の「子育て幽霊」の項。角川書店、昭和六十一年。関敬吾『日本昔話集成』第二部の1。角川書店、昭和四十八年。三六六頁から三七四頁）。一例を挙げれば、天和四年（一六八四）に成つた棕梨一雪『古今犬著聞

胎児はなぜ排出されたか

集』の卷八に、「孕女死て子を産事」と題して次のように記されている（堤邦彦『近世説話と禅僧』和泉書院、一九九九年。一三三頁から四頁）。『古今犬著聞集』は京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成』第七卷（臨川書店、平成八年）所収本（井上敏幸翻刻・解題）を見た。

【現代語訳】

土佐の国の浦辺（「浦辺」という地名は見当たらない。浦の近辺という意味か。）で、ある人が懐胎したまま死にました。染帷子を着せて葬つたそうです。葬つた辺りに餅屋がありました。毎晩、銭一文ずつ持つて餅を買いに来る婦人がいました。六日、来て、七日目に帷子を持つて来て、これで買える分を下

さい、と言つて、錢一文分の餅を受け取つて帰りました。翌日、その帷子を見ると、あまりに汚れていたの、洗つて乾しておきましたところ、彼女の夫が通りあわせ、これを見て、不思議な事もあるものだ、もしかすると塚を掘つて盗み取つたのかも知れない、と疑つて、その由来を詳しく尋ねましたところ、かくくしかじかと餅屋が語りました。それならば、というわけで、夫が、その夜、餅屋の方に来る者を伺い見ると、我が妻でしたので、跡をつけて行くと、墓所に入りました。心静かに耳を寄せて聞くと、赤子の泣き声がしましたので、ますます不思議に思つて、塚を掘つて見ると、子供が産まれて遺体の膝の上に居ました。夫はその子供を連れて帰つて育てました。子供は成人して、寛文元年（一六六一）の頃、十八九才に見えました、大坂にやつて来た、ということです。死んでも子供を思う道に迷う親心こそ哀れであります。

このような日本の墓中子育て幽霊話は、南方熊楠「死んだ女が子を産んだ話」（『全集』第二卷所収、平凡社、昭和四十六年、二十五頁。該当箇所の初出は大正五年。）が指摘するように、中国の墓中子育て幽霊話が出処である。中国の墓中子育て幽霊

話は、澤田瑞穂「墓中育兒譚」（『鬼趣談義』所収、中公文庫、一九九八年。初出は昭和四十六年。）の中に集められている。一例を挙げれば、元の吾衍（一二六八—一三一一）の『閒居録』に次のように記されている。『閒居録』は景印四庫全書本を見た。南方前掲論文は『淵鑑類函』卷三二一所引の『閒居録』の該当記事を紹介している。

【和訳】

宋の末年のことです。蘇州の餅屋が売り上げ金を調べていますと、死者のための紙銭が出てきました。不思議に思つて、餅を売るたびに必ず、買った人と支払われた錢とを憶えておきました。随分経つてようやく、一人の婦人であることがわかりました。その婦人の跡をつけて行くと、一つの塚に至つて消えました。そこで餅屋はこのことを官司に報告しました。塚を開くと、婦人が柩の中に横たわつており、小児がその傍らに坐つてゐるのが見えました。他人に覺られたので、婦人はきつと二度と外に出ず、小児を餓死させてしまふだろうと心配しましたが、物好きな人が小児をもらつて帰つて養いました。小児は成長して、常人と異なる所はありませんでした。その姓はわかりませ

ん。郷里の人はその人を鬼官人と呼びました。元朝の初めにはまだ存命でしたが、その後数年して亡くなりました。

【原文】

宋之末年、姑蘇売餅家、検所鬻錢、得宴幣焉。因怪之、每鬻餅、必（もと）「不」に作る。景印四庫全書本『淵鑑類函』卷三二一所引に従って改めた。識其人与其錢。久之、乃一婦人也。跡其婦、至一塚而滅。遂白之官。啓塚、見婦人卧柩中、有小兒坐其側。恐其為人所覓、必不復出、餓死小兒。有好事者、收婦養之。既長（もと）「既長」二字なし。『淵鑑類函』卷三二一所引に従って補った。与常人無異。不知其姓。郷人呼之曰鬼官人。国初時、猶在。後数年、方死也。

「売餅家」とあるが、餅は中国では小麦粉製の菓子である。

南方熊楠『郷土研究』第一卷第二号を読む（『全集』第二卷所収、前掲、五六九頁。初出は大正二年。）は、日本の墓中子育て幽霊話は「仏經の翻案だろう。」として、南朝宋の沮渠京声訳『旃陀越国王經』の話を紹介するが、『大正新脩大藏經』第十四卷、經集部一所収『仏說旃陀越国王經』を見ると、母の死後に塚の中で生まれた子供は、半身が朽ちなかった母の乳を

胎児はなぜ排出されたか

飲んで育ったことになっており、死んだ母が店に来て子供のために菓子を買ったという一段は出てこない。南方前掲「死んだ女が子を産んだ話」（三十二頁。該当箇所の初出は大正十三年。）が、仏經に見える墓中出生話のおそらく最も古いものとして紹介している、西晋の沙門法立・法炬共訳『諸德福田經』の話も同様である（『大正新脩大藏經』第十六卷、經集部一所収『仏說諸德福田經』）。

よって、日本の墓中子育て幽霊話の源は中国の墓中子育て幽霊話であって、これらの仏典の話は直接の源ではない、とみなすべきである。ただし、これらの仏典の話が中国の墓中子育て幽霊話の材料となった可能性はある（牛嶋英俊『飴と飴売りの文化史』弦書房、二〇〇九年。一六九頁から一七〇頁）。中国の墓中子育て幽霊話は、当然、日本の墓中子育て幽霊話と同じであるが、次の三つの要素から成っている。1、死んだ婦人が子供を産む。2、その子供が生きている。3、その子供を死んだ母が育てる。このうち、2と3とが仏典に由来し、3の内容が、中国の話では、死んだ母の乳を子供が飲んで育つことから、死んだ母が店に来て子供のために菓子を買うことに変えられた、と考えることができる。

このような中国の墓中子育て幽霊話から、現実にはあり得ない要素を差し引くとどうなるか。まず、3の死んだ母が子供を育てるといふ要素は論外である。次に、2の死んだ婦人が産んだ子供が生きているといふ要素について言えば、胎児は肺呼吸を行わず、胎盤で母体血から酸素の供給を受け、炭酸ガスを母体側に放出するから(岡井・綾部編『標準産科婦人科学』医学書院、二〇一六年。三一四頁)、母体が死ねば、ガス交換がで

きなくなつて胎児も死ぬ。よつて、死んだ婦人が産んだ子供が生きていることはあり得ない。2と3の要素を差し引くと、1の死んだ婦人が子供、しかも死んだ子供を産むといふ要素だけが残る。死んだ婦人が死んだ子供を産むといふ要素に尾鰭をつけたのが、次に掲げる『太平御覧』巻三六一、人事部二、産所引『異苑』の話である。

【和訳】

沛国(沛郡。現在の安徽省蕭県)の武探の妻、林氏は、南朝宋の元嘉年間(四二四―四五三)に、懐胎したまま病を得て亡くなりました。俗信では妊婦の遺体を含胎したまま柩の中に入れることを忌み、必ず腹を割いて胎児を取り出さなければなり

ません。妻の乳母はこれを痛ましく思つて、遺体を撫でて、「もし天道に靈力があるのなら、遺体が切り裂かれることがないようにして下さい。」と祈りました。すると、ほどなくして、遺体の顔色が赤味を帯びてきました。そこで、婢を呼んで一緒に遺体を支えました。にわかに胎児が排出されて遺体は倒れました。

【原文】

沛国武探之妻林氏、元嘉中、懷身、得病而死。俗忌含胎入柩中、要須割出。妻乳母傷痛之、乃撫尸而呪曰、若天道有靈、無令死被擘裂。須臾、尸面絶然上色。於是、呼婢共扶之。俄頃、兒墮而尸倒也。

『異苑』は南朝宋の劉敬叔の撰である。劉敬叔は宋の泰始年間(四六五―四七二)に歿した(『四庫全書総目』巻一四二)。

胎児のその後について何も語られていないのは、胎児が死んでいたからである。死んだ婦人が死んだ子供を産むという現象は即ち所謂「棺内分娩」「死後分娩」に他ならない。中国の墓中子育て幽霊話の核心は「棺内分娩」現象なのである。加藤徹『怪力乱神』(中央公論新社、二〇〇七年。二三〇頁)は既に

「怪談の類型の一つ「子育て幽霊」も、棺内分娩と関係があるかもしれない。」と述べている。

二 棺内分娩の原因の解明

池田・鈴木編『標準法医学』（医学書院、二〇一三年）に「妊娠末期の女性の死亡後、腐敗ガスが大量に発生すると子宮内や腹腔内に発生したガスの圧力で胎児が娩出されることがあり、棺内分娩と呼ばれる。」（二十九頁から三十頁）と述べられているように、棺内分娩の原因は腐敗ガスである。これは今では常識であるが、棺内分娩の原因が腐敗ガスであると確定するまでには議論があった。

ライマン・Reimann「母体の死後の分娩に（こゝ）Ueber Geburten nach dem Tode der Mutter (Archiv für Gynaekologie 第十一巻掲載、一八七七年）に拠れば、論文執筆者の大多数 (Maizier, Casper, Depaul 等) が、死体分娩の原因は腐敗ガスの圧力であると説明するのに対し、ただ数名の者 (Martin, Fodéré, Aveling, Oslander) だけが、死後の子宮の収縮運動によって子供が娩出されることがありうると主張している、という（二四三頁）。

胎児はなぜ排出されたか

腐敗ガス説を唱える一人としてライマンが挙げているカスパー Casper は、一八五六年に発表した論文の中で、子宮収縮説は、胎児の排出が、妊婦の死後すぐにはなく、死後数日経ってはじめて起こる事実を説明することができず、この事実を説明できるのは、腐敗ガスが、死んで抵抗力のない子宮への圧力によって、分娩を助ける動因を与える、という仮説しかない、と述べている（佐立訳「棺内分娩」関西大学法学論集第六十三巻第六号掲載、二〇一四年。二五九頁）。

腐敗ガス説に対してライマンは、一八七七年に発表した前掲論文の中で、「多くの事例で、腐敗ガスの圧力は、そもそも子供の分娩を導かないか、あるいは少なくとも唯一、効果がある力ではなかった。」（二四三頁）と述べ、「子宮は婦人の死後もなお繰り返し収縮する。そして、この方法で子宮は胎児を排出することができ。」（二五四頁）と主張し、「単一の原因だけでは死後の分娩を説明するのに十分ではない。明らかに、死後の分娩は、若干の事例では、腐敗ガスの圧力が原因であり、他の事例では、子宮の収縮が原因である。そして、大多数の事例では、おそらくは、それら両方の原因が作用する。同時にではなく、先に子宮の収縮が、後で腐敗ガスが作用する。」（二五五

頁)と結論している。

ライマン説に対してブライシュ Bleisch は、一八九二年に發表した論文「棺内分娩の一事例」Ein Fall von Sargeburt (Vierteljahrsschrift für gerichtliche Medizin 第三編第三巻掲載)の中で、「ライマンは、死体に發生するガスの圧力が少なくとも主要な原因ではない自発的な死体分娩の明白な先例を示すことに成功していない。」(四十六頁)としながらも、「死体分娩の原因を常に腐敗ガスの作用に帰することができるのか、それとも、死体分娩は、全く死後の子宮収縮の作用によつても起こり得るのか、という疑問に対しては、現在までに報告された事例に基づく限りでは、最終的な解答を与えることはできない。」(四十七頁)と述べる。しかしブライシュは、腐敗ガスの作用が原因であることが明らかな死体分娩の新しい事例の報告を積み重ねていけば、子宮収縮による死体分娩の十分に明白な事例が知られていないので、原因が疑わしい死体分娩の事例に対して子宮収縮説を適用する根拠が、ますます少なくならざるを得ない(四十八頁)、と述べて、腐敗ガス説を支持している。

片山国嘉訳述『法医学大成』第六冊(南江堂、明治三十二年八六二丁)に拠れば、一八九三年に刊行されたホフマン

Hofmann の『法医学の教科書』Lehrbuch der gerichtlichen Medizin 第六版では、死体現象の項に、「腐敗ガスの圧迫により(中略)或いは妊娠中にはその胎児を駆出することあり。これ殊に分娩中に死亡せる者において容易く發現するもの」とし。ブライシュ氏(論文掲載誌の情報を省略。佐立注)はかくの如き一例の記述と共に所謂「棺内分娩」の多数を集録し云々(片山訳。文字遣いを変えた。)と記述されている。ここでは、前掲ブライシュ論文が紹介されているが、ブライシュ論文が完全には否定しなかった子宮収縮説は取り上げられていない。ホフマンはブライシュ論文を読んだ上で子宮収縮説を取り上げなかったのであるから、このホフマンの教科書によつて、子宮収縮説は切り捨てられ、腐敗ガス単独原因説が承認されたのである。すると、棺内分娩の原因が腐敗ガスであることが確定したのは、西欧の法医学、少なくともドイツ・オーストリアの法医学では、十九世紀末にホフマンの教科書第六版が刊行された時であるとなすことができる。

ところが一方、中国の法医学では、早くも十三世紀には、腐敗ガスとは言わないまでも、何らかの気体が棺内分娩の原因であると考えられていた。淳祐七年(一二四七)の自序を持つ南

宋の宋慈の『洗冤集録』の卷二、九、婦人に次のように記されている。『洗冤集録』は四庫全書存目叢書所収景印元刻本を見
た。

【和訳】

懐胎している婦人が殺され、あるいは出産の際に胎児を娩出
しないまま死亡し、遺体を地下の墓穴に埋めますと、検査の時
に墓穴を開くと、死んだ子供が出てきていることがあります。

その原因を推察しますと、おそらくは、遺体を地下の墓穴に埋
め置くと、地・水・火・風の四元素が集まって生まれた気体が
遺体に吹き込むことにより、全身が膨脹し、骨節の合わせ目が
開き、その結果、腹内の胎児が排出されるでしょう。また、
臍帯の類が皆、遺体の脚の下に出て、産門から血水悪物が流出
していることがあります。

【原文】

有孕婦人被殺、或因產子不下身死、屍經埋地窖、至検時、却
有死孩兒。推詳其故、蓋屍埋頓地窖、因地水火風吹死人、屍首
脹滿、骨節縫開、故逐出腹内胎孕孩子。亦有臍帶之類、皆在屍
脚下、産門有血水惡物流出。

胎児はなぜ排出されたか

【訓読】

有孕の婦人、殺され、或いは子を産まんとして下らざるに因
りて身死し、屍、地窖に埋むるを経ば、検時に至り、却つて死
孩兒有り。其の故を推詳するに、蓋し屍、地窖に埋頓せば、地
水火風、死人を吹くに因り、屍首、脹滿し、骨節、縫、開く。
故に腹内の胎孕孩子を逐出す。亦た臍帯の類、皆、屍の脚下に
在る有り、産門、血水悪物の流出する有り。

「地水火風」というのは、仏教用語であり、一切の物質を構
成する四つの元素「地大」「水大」「火大」「風大」のことであ
る（中村元『広説仏教語大辞典』中巻、「四大」の項。東京書
籍、平成十三年）。宋慈は、何らかの気体が遺体の中に充満し、
その圧力で胎児が押し出される、と正しく考えたのであるが、
その気体が体内で発生するとは考えず、地下の墓穴内で「地水
火風」の四元素が集まって気体が生まれ、その気体が遺体の中
に吹き込んで、遺体が膨脹する、と考えたのである。しかし、
「棺内分娩」現象は、地下の墓穴内だけではなく地上でも起こ
る。このことを発見して宋慈の考えに対して疑問を提出したの
が元の王与である。王与はその著書『無冤録』の卷上、婦人懷

孕死屍で次のように述べている。『無冤録』は『沈家本全集』(中国政法大学出版社、二〇一〇年)第八卷所収の枕碧樓叢書本を見た。和訳に当たっては、甘建一等訳著『無冤録今訳』(海南出版社、二〇一一年)を参考にした。

【和訳】

『洗冤録』には「妊婦が殺され、あるいは出産の際に分娩しないまま死亡し、その遺体を地下の墓穴に埋めると、地水火風から生まれた気体が遺体に吹き込むことにより、全身が膨脹し、骨節の合わせ目が開く。その結果、腹内の胎児が排出される。」という所見が記されています。私が昔、江浙行省杭州路の塩官州(現在の浙江省海寧県の西南)の提控案牘(州の参佐官の一つ)に任じられていた時、至治三年(一三三三)の春、崇德州(江浙行省嘉興路に属する。現在の浙江省桐郷県の南西。)石門郷の妊婦、沈観の女子の遺体を覆験(初検に次いで行われる二度目の検屍)しました。当初、遺体は、殯殮(かりもがり)のために棺に入れられており、懐胎したままであったことは、多くの人の明白な証言があります。後に房親(同居の親族のことか。)の罪が発覚したので、棺を開いて、初検が行われたとこ

ろ、死んだ胎児が母親のしたばかまの中に排出されていました。事実に従って覆験を行ったのですが、地下の墓穴中に発生する気体が胎児を押し出すという『洗冤録』の記述と食い違っていることを思うたびに、疑問を振り払うことができませんでした。

同じ年の夏、私はまたもや塩官州で、落水して死んだ一妊婦の遺体を検験しました。初検の時には、胎児は母親の腹の中に入っていました。覆験の後、親族が遺体を受け取って、かりもがりをまだ始めないうちに、胎児が自然に排出されました。二体の死んだ胎児は両方とも、妊婦の遺体がまだ地下の墓穴に埋葬されないうちに、母親の腹からそれぞれ離れて出てきました。すると『洗冤録』の議論には、まだ至らない所があるのです。

【原文】

洗冤録験、有孕婦人被殺、或因産子不下身死、其屍經埋地窖、因地下水火風吹死人、屍首脹滿、骨節縫開(もと「開」字なし)。

『洗冤集録』に従って補った)。故逐出腹内胎孕孩子。予昔任塩官案牘。至治三年春、復験崇德州石門郷孕婦沈観女死屍。当元、殯殮入棺、懐胎在腹、衆証明白。後因房親発覚、開棺初検、則死胎已出在母棍袴中。雖已従実検復、每思与洗冤録抵牾、未能寤疑。是歳之夏、予又於塩官検一孕婦落水屍。初検、所懐胎

孕、亦在母腹中。復検之後、親屬領屍未殯、胎亦自出。自二死胎並未經理地窖、俱各出離母腹。乃洗冤錄議論、有所未及者。

【訓読】

洗冤録驗すらく、云々（『洗冤集録』の文は既出。訓読文を省略する。）と。予、昔、塩官の案牘に任せらる。至治三年の春、崇德州石門郷の孕婦、沈観の女の死屍を復驗す。当元、殯殮せんとして棺に入る。胎を懷きて腹に在ること、衆証、明白なり。後、房親、發覺するに因り、棺を開いて初検するに、則ち死胎已に出でて母の襯袴中に在り。已に実に従いて檢復すとも、洗冤録と抵牾するを思ふごとに、未だ疑いを寤ます能わず。是の歳の夏、予又た塩官に於いて一孕婦の落水屍を検す。初検にては、懷くところの胎孕、亦た母の腹中に在り。復検の後、親屬、屍を領し未だ殯せざるに、胎亦た自ら出づ。二死胎並びに未だ地窖に埋むるを経ざる自り、俱に各々母腹を出離す。乃ち洗冤録の議論、未だ及ばざるところの者有り。

『無冤録』に附された王与の自序には、自序が書かれたのは「至大改元」の年（一三〇八）であると記されているのであるが、ここには「至治三年（一三三三）」の語が出てくる。楊奉

胎児はなぜ排出されたか

現「王与生平事略及『無冤録』成書年代問題考辨」（前掲『無冤録今訳』所収、三五二頁）に拠れば、「至治三年」の語に誤りはなく、自序の「至大改元」の語が間違っており、「至元改元（一三三五）」の誤りである可能性が大きい、という。

地下の墓穴中に発生する気体が妊婦の遺体の中に充満して骨節を開き、胎児を押し出す、という宋慈の説に対して、王与は、自分が見た棺内分娩は二例とも地上で起こったので、胎児を押し出す気体は地下の墓穴中で発生するのではない、と考えて、宋慈の説を「未だ及ばざるところの者あり（至らない所がある）」と評したのである。しかし、それではその気体はどこで発生するのか、あるいはそもそも気体が胎児を押し出すのではなく、胎児は別の原因で排出されるのか、という問題に対しては、王与は何の仮説も提出しなかった。王与だけではない。中国の検屍関係者はその後五百年以上の間、この問題に対して誰も何の仮説も提出することなく、十九世紀末に至って、西欧法医学の輸入時代を迎えたのである。